



戸本一真の イベントイングライフ in UK

vol.01

2015年10月～11月

東京オリンピックで個人4位という、日本の総合馬術競技史上最高の成績を出した戸本一真選手（日本中央競馬会）。障害馬術選手として活躍していましたが、東京オリンピックを目指して総合馬術に転向、2015年秋からイギリスを拠点にトレーニングをスタートしました。総合馬術ではほぼ初心者だった戸本選手がステップアップしてオリンピックで入賞するまでのトレーニングや競技、そしてイギリスの日常などを紹介していきます。

また、来月号では馬場馬術の佐渡一毅選手のレポート記事をスタートし、戸本選手と佐渡選手のレポートを交互に掲載する予定です。これらの記事は戸本選手・佐渡選手が自身で執筆した JRA への報告書を、馬術情報用に編集するものです。転用を快諾してくださった JRA およびお二人に感謝申し上げます。

日本中央競馬会馬事公苑の戸本一真です。東京オリンピックではたくさんの応援と激励をいただき、本当にありがとうございました。5年半前にイギリスに渡った時には、オリンピックであのような結果を出せることは想像していませんでしたが、海外研修という素晴らしい機会を与えてくれた JRA をはじめ、イギリスでサポートしてくださったトレーナー、グルーム、そして応援してくださった皆さんのおかげで、日本代表として力を尽くすことができました。

渡英前は障害馬術競技を専門としていたため、総合馬術競技に転向することには様々な葛藤がありました。その一つがクロスカントリーに対する“恐怖心”です。明治大学馬術部時代など過去には総合馬術競技に出場したこともあります。オリンピックともなればとてつもないボリュームと難度のクロスカントリーを走行しなければならず、自分にできるのだろうか？という不安がありました。そしてそれを解消するためには、しっかりトレーニングをして完走実績を積み上げるしかないと思い、ひたすらそれに取り組んできました。私が経験したことが、今後海外で活動したいと思っている皆さんや、総合馬術に興味のある皆さんの役に立てば幸いです。

❖ イギリス生活、スタート

海外研修に向けて最初にならなければならなかったのは、受け入れてくれる厩舎を決めることでした。私は2014年にベルギーで障害馬術の研修を受けたことがありますが、今回は総合馬術だったので、先輩方から「ヨーロッパの中でも総合馬術が盛んで競技会も数多く開催されているイギリスでトレーニングをするべき」というアドバイスをもらいました。しかし、イギリスのトレーナーや選手との繋がりもなく、言葉の面でも不安があったことから、最初は日本人でイギリス在住の土屋毅明氏の厩舎でお世話になることにしました。土屋氏は明治大学馬術部の先輩で、23歳の時に単身イギリスに渡って以来、総合馬術の選手としてアトランタ（1996年）とシドニー（2000年）の2回のオリンピックに出場、2011年のロンドンオリンピック地域予選を最後に大きな国際大会から引退し、指導や若馬の調教をメインに行なっています。

2015年10月1日、東京オリンピックに向けた海外研修が始まりました。土屋厩舎はイギリス全土の中心よりやや北東に位置し、ロンドンから車で2時間ほど北に行った Stamford という街のはずれにあります。街の中心までは車で15分ほどかかり、厩舎の周りには民家しかないため、車がないと生活には厳しい環境ですが、馬が生活するうえでは最高の静かさと、広大な土地が広がり、穏やかでゆったりとした時間が流れているように感じます。また、至る所に牛や羊が放牧されており、鹿や野ウサギやリスまで見られるほど自然が溢れています。すぐ隣の家でもロバやミニチュアホース、馬車馬を所有していて、一般道を走行しているのをよく見かけます。

土屋厩舎は完全なプライベート厩舎で、土屋氏と奥様の Natalie さん、グルームの Jamie の3人に私が加わりました。自宅裏から数 m 上ったところに厩舎（馬房）があり、そこからさらに数 m 上がったところに5頭用のウォーキングマシン、さらに数 m 上がったところに馬場があり、その数 m 上に放牧場という造りになっています。



▲土屋厩舎の馬房全景。右奥に見えるのはウォーキングマシン

馬達はトレーニング終了後、夕方までの時間を放牧場で過ごしています。土屋厩舎では多少の雨が降っていても、放牧やウォーキングマシンを行い、できるだけ厩舎から出してあげるようにしているとのことでした。「これでは馬が風邪をひいてしまうのでは？」と思えるほどの雨でも放牧



▲隣の家のロバとミニチュアホース

していたことに最初は戸惑いましたが、自然に近い環境で自由に草を食べている馬たちを見て、ストレスをかけずにトレーニングを行なっていくことの大切さを感じました。日本の環境で同じ生活をさせることは難しいですが、馬のストレスについて常に注意深くケアしてあげることは、環境に関係なく我々人間がしていかなければならないことだと思います。

イギリスでの研修を始めるにあたって「イギリスはほとんど毎日曇り」と聞かされていたのですが、10月は太陽が見られる日が続き、気温は10度前後でした。11月に入ると10度を下回る日が多くなり、ヨーロッパの厳しい冬がそこまで来ていると感じるようになってきましたが、基本的には乾燥しており、小雨の日が続いても日本のようにジメジメした感じはならず、環境の違いを感じています。



▲自然に近い環境の広大な放牧場

❖ 2頭のパートナー

現在のパートナーは Brookpark Vikenti (ヴィケンティ) と Tacoma D'hoiset (タコマ) という素質に恵まれた2頭で、いずれも JRA が所有しています。

Brookpark Vikenti

2015年当時7歳 セン アイリッシュスポーツホース

Vikenti は非常に繊細で軽いタイプの馬で、動きが柔らかくて大きく、普段のフラットワークだけでもかなりの素質を感じます。騎乗する際や下馬する際には細心の注意が必要で、できるだけ静かに乗り降りしなければ馬が走り出してしまう一面もありますが、一度馬から降りてしまえば、何も繋がなくてもいつまでもじっとそこに立っているような大人しい性格です。繊細であるがゆえに、他の馬の足音に驚いて走り出してしまうことや、シートしているポジションが少し変わっただけで、駆歩から速歩におちてしまうなど、まだまだこの馬を知るには時間がかかりそうですが、この繊細さを短所だとは思っていません。むしろ時間をかけてトレーニングを行い、馬をじっくり知ることができれば、この繊細さが最大の武器になると考えています。幸いにも私自身が繊細で軽いタイプの馬のほうが好きなので、苦手意識を持たずにトレーニングを行うことができています。7歳と若いのですが、2スター（現3スター）クラスの競技を経験しており、これからの成長を考えると数年先が非常に楽しみな馬なので、今は結果を気にするのではなく、無理せず確実にトレーニングを行いながら人馬で共に成長していくことができたら願っています。



Profile

戸本 一真（ともと かずま）

- 1983年 岐阜県本巣市に生まれる
- 1991年 8歳で初めて馬に乗る
- 1999年 高校入学と同時に本格的に馬術を始める
- 2002年 明治大学馬術部入部
- 2006年 日本中央競馬会入会、競技では障害馬術が専門
- 2016年 総合馬術に転向してイギリスで活動開始
- 2018年 世界選手権団体4位（タコマ）
- 2021年 東京オリンピック個人4位（ヴィンシー JRA）



Tacoma D'hoiset

2015年当時8歳 牝 セルフランセ

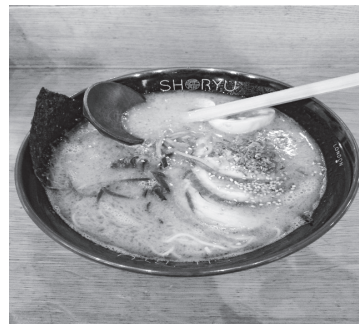
Tacoma は、馬場運動に関してはオーソドックスで乗りやすいタイプの馬で、踏歩変換やハーフパスなどの運動もそつなくこなすことができ、私の前に乗っていたフランス人のライダーが、いかに丁寧にトレーニングを行っていたかを容易に想像することができました。体高が170cm 以上あり、一見すると大型でまとめるのが難しそうにも見えますが、体高に比べて体の幅が細いため、体の小さな私でもそれほど馬体の大きさを感じずにトレーニングを行うことができている。駈歩の際にやや弾発力に欠けると感じる時もありますが、非常に真面目な性格であるうえに冷静で学習能力に長けているので、これからのトレーニングで改善していける範囲内だと考えています。既にアドバンスクラス（現4スターと3スターの中間にあたるクラス）を経験していることもあり、クロスカントリーの経験が少ない私にとって、誰よりの先生になってくれる馬だと考えています。決して「馬頼み」という意味ではありませんが、人に経験がない部分を Tacoma が補ってくれると信じています。



❖ 番外編

10月 下旬 に JRA ロンドン事務所に行ったときの出来事をご紹介します。

イギリスには多くの日本人観光客が訪れており、特にロンドン中心地では日本語で会話



している人々に何度も遭遇しました。しかし、驚いたことはこの日訪れた和食レストランは、我々以外は全て外国人（日本人以外）でした。聞くところによると、近年ロンドンでは和食がブームになっているようで、ロンドン市内で和食を提供しているお店が数店舗あるとのことでした。特にラーメンが人気のようで、至る所にとんこつラーメン店があり、日本でも有名なラーメン店もあったのですが、そのお店でも外国人ばかりがラーメンを食べている様子には驚きました。

イギリスに渡ってから1ヶ月が経とうとしていた私は、もともとパン派だということもあり、それほど和食が恋しいというほどではなく、むしろイギリスの食事を楽しんでいたのですが、さすがにとんこつラーメンを食べる機会はなく、これを逃せば次はいつとんこつラーメンにありつけるかわからない！という衝動に駆られ、《SYORYU (昇竜)》というラーメン店に入りました。店員のほとんどは外国人でしたが、日本の文化に倣って「いらっしゃいませ」と声をかけられた時は、なんだか心が落ち着きました。逆にオーダーをとる女性は、どうみても日本人でしたが、超ネイティブな英語で注文を聞かれてしまい、焦ったあげく《KOTTERI TONKOTSU with AJITAMA》なるラーメンを注文したのですが、味に間違いはなく、とても美味しい日本のラーメンをいただきました。

ロンドンの中心地で和食がブームになっていることや、とんこつラーメン店がいくつもあることには驚きましたが、それ以上に、普段それほど好んで食べないとんこつラーメンも、こうして異国の地で久々に食べることで本当に美味しいと感ずることができ、改めて「食」は本来の自分の体調や、“自分の生活リズム”を保つためにも大切なことなのだと感じた出来事でした。